

(資料)

総合的な学習の時間を生かす カリキュラム・マネジメント

—— 上越市における地域に密着した実践を事例として ——

大久保 正 廣*

はじめに

文部科学省(2017)による新学習指導要領においては、次の6点にわたってその枠組みを改善するとともに、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが求められている。

- ①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)
- ②「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)
- ③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
- ④「子供一人一人の発達をどのように支援するのか」(子どもの発達を踏まえた指導)
- ⑤「何が身に付いたか」(学習評価の充実)
- ⑥「実施するためになにが必要か」(学習指導要領の理念を実現するために必要な方策)

総合的な学習の時間においても、これまで地域や学校、児童生徒の実態等に応じて、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習とすることと同時に、探求的な学習や協働的な学習とすることが重要であるとしてきた。そうした点を踏まえた今回の目標の改善として、以下の2点がある。

・総合的な学習の時間の目標は、「探求的な見方・考え方」を働かせ、総合的・横断

* 福岡大学人文学部教授

的な学習を行なうことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指すものであることを明確化した。

- ・教科横断的なカリキュラム・マネジメントの軸となるよう、各学校が総合的な学習の時間の目標を設定するに当たっては、各学校における教育目標を踏まえて設定することを示した。

このように、今回の総合的な学習の時間における改訂においては、カリキュラム・マネジメントがさらに大きな位置を占めるものとなっている。総合的な学習の時間は、その総合的・統合的な特質のゆえに必然的な流れであり、教科等を含めた横断的な視点がこれまで以上に必要となっている。中央教育審議会ですべて議論してきたカリキュラム・マネジメントは次の3側面である。

①カリキュラム・デザインの側面

②PDCA サイクルの側面

③内外リソース活用の側面

①の教科横断的で組織的な配列は無論重要であるが、特に②においては、地域や子どもたちの現状に応じて教育課程を編成、実施、評価し改善を図ることが重要となり、③においても地域の人的・物的資源を含めて総合的に活用することが実践の要となる。本稿では、地域と密着した上越における実践を事例として、今回の「探求的な見方・考え方」を働かせ課題を解決し自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成と、「各学校における教育目標」と総合的な学習の時間の整合性という二つの課題を踏まえつつ、そのカリキュラム・マネジメントの在り方に迫りたい。

1. 上越カリキュラム

上越市では、平成19年度「上越市総合教育プラン」を策定し、以後10年間の上越市の教育の姿を示した。これを受け、平成20年度は「上越市学校教育目標」を改訂し、「ふるさと上越を愛し、学ぶ力、豊かな心、健やかな体を持って、自立と共生ができる子どもを育てる」とした。「知・徳・体」をバランスよくはぐくむだけでなく、自分が生まれ、育ったふるさと上越に愛着をもち、自らの力でよりよく生きていこうとする「自立」、様々な人と共に認め合い高め合いながら生きていこうとする「共生」の力と心を育てていきたいというものである。そのため、上越市立教育センター／上越カリキュラム開発研究推進委員会(2013)による「上越カリキュラム」では、「学習指導要領」「上越市総合教育プラン」「上越市学校教育目標」等を踏まえた、市立学校のカリキュラム

づくりの指針や内容を示し、学校は学習指導要領を基に「上越カリキュラム」で示されたモデルや指針、内容を取り入れて、公立学校としての標準性を確保しつつ、学校の独自性、子どもたちや地域の実態を踏まえたカリキュラムを目指している。

ここにおいては、カリキュラム・マネジメントは次のようになる。

- ・学校、地域、子どもの現状を見直す……実態認識からの課題の顕在化
- ・学校課題・目標を明確化・焦点化する……グランドデザインの作成
- ・学習内容の関連化・体系化を図る……視覚的カリキュラム表の作成
- ・カリキュラムの実践・評価・改善を図る……確実な評価と改善策
- ・マネジメントのための組織やシステムをつくる……攻め・協働のサイクルを生み出す

この「上越カリキュラム」を踏まえた総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメントの実践として、ここでは以下2から4においては市立雄志中学校における実践を、5の授業をつくるにおいては雄志中学校の資料がないため、国語科と横断的につないだ市立高士小学校4年生の実践を取り上げる。

2. グランドデザイン

学校のグランドデザインは、「目指す学校像や児童・生徒像等だけでなく、これらの実現を図るための具体的な課題と方策等を示した基本構想」である。「学校運営や教育活動の改善に直結するもの」であり、「教職員間で共有化」し、さらにまた、「家庭や地域の理解や協働・参画が得られるように、記載内容を精選」する必要があり、さらに、様々な場で活用していくものである。

グランドデザイン作成の実際は、本カリキュラムでは、4つのポイントに分けられる。

- ①学校評価に基づき、教育課題を焦点化する。
- ②教育課題解決のための方策を立案する。
- ③グランドデザインに盛り込む内容を決定する。
- ④グランドデザインを効果的に活用する。

これら4つのポイントの実際を「上越カリキュラム」にある平成24年度の雄志中学校の実践から引用すると次のようになる（太字が引用）。ここではまず①～③についてそれぞれの項目ごとに確認し、④は3の視覚的カリキュラムとも重なるためそこで確認したい。

①学校評価に基づき、教育課題を焦点化する。

<具体的な目指す生徒像を示し、教育課題を焦点化>

前年度の学校評価から生徒の実態を把握し、課題を整理することで中学校の教育課題を明確にしました。人間関係形成能力の育成、自己肯定感の向上、意欲的な学習態度を育成する上でキャリア教育の有効性を再確認し、キャリア教育の理念を教育課程の中核に据え、すべての教育活動を見直しました。そして、「大きな志を抱き、限りなく伸びようとする生徒の育成」を重点目標に設定し、特色ある教育の実践を目指しました。

<重点目標の全職員共通理解>

キャリア教育は生徒の自立を促すもので、すべての教育活動で実践できるものです。キャリア教育の推進を意図した重点目標を校内研究の研究主題として設定することで、授業力向上を基盤にした自立の力を育成する（目指す生徒像を実現する）研修の共通理解と研修の日常化を図る。

①においては、上越市における学校教育目標を踏まえてすでに雄志中学校の教育目標とされてきた「知性を高め、豊かな心を持ち、たくましく実践する生徒」という教育目標を達成するために、キャリア教育を中核とするその重点目標として「大きな志を抱き、限りなく伸びようとする生徒の育成」を掲げ、授業力向上を基盤にした自立の力を育成する研修の共通理解と研修の日常化を図っている。このキャリア教育を中核とする方向性は、平成30年度における現在においても継続されており、年度ごとに反省と改善がなされている。

②教育課題解決のための方策を立案する

<キャリア教育をとおして付けたい力の明確化>

教育課題解決のために、生徒に身に付けさせたい5つの能力（「人間関係形成能力」「情報活用能力」「社会形成能力」「将来設計能力」「意思決定能力」）を設定し、教育活動全体を通して育成していくことを全職員で共通理解し、指導目標としてグランドデザインに位置付けました。

<重点課題達成のための具体的な取組>

キャリア教育を効果的に行うために、3領域を「自立プログラム」「共生プログラム」「深化・統合プログラム」に編成しました。3つのプログラムに目指す生徒とキャリア教育の具体的な能力を示し、活動のねらいと活動内容をより具現化し、全職員で指導できるようにしました。

②においては、生徒に身に付けさせたい5つのキャリア教育の目標である能力（「人間関係形成能力」「情報活用能力」「社会形成能力」「将来設計能力」「意思決定能力」）を設定している。そして、その能力を育成するために「次代を担う『志』をはぐくむ

キャリア教育を推進」するため、「自立プログラム」「共生プログラム」「深化・統合プログラム」の3領域に編成し構造化している。

③グランドデザインに盛り込む内容を決定する

<キャリア教育を中核とした教育課程の構造化>

グランドデザインをより簡素化し、教職員はもちろん保護者や地域の方に活動のねらいをより明確に理解してもらうために改訂しました。生徒像で示した重点目標や身に付けたい力、教育課程における具体的な取組、地域との連携をキャリア教育の視点で構造化し、指導の方向性を明確にすることで、キャリア教育を中核とした特色ある教育活動が一目で分かるようにしました。

<全職員で確認し、全職員でデザインすること>

グランドデザインの作成にあたっては、職員研修でワークショップを行い決定しました。全職員が制作にかかわることで、活動の意義や指導の道筋を総合的、構造的に共通認識し、キャリア教育の必要性や重要性を再確認するとともに、主体的に学校運営に参画する意欲が高まりました。

③においては、全職員によるワークショップで確認、デザインする作業を経て、各プログラムをさらに具体化している。ここでは、「志ある生き方」を志向するために「自立プログラム」として「教科学習」、「深化・統合プログラム」として「道徳、特別活動」、「共生プログラム」として「総合的な学習の時間」に分類し、それぞれを<学ぶ力><実践する力><共に生きる力>として位置づけ、見やすく構造化し、全職員が主体的に学校運営に関わろうとしている。

この24年度の実践では、「総合的な学習の時間」は、「共生プログラム」として<共に生きる力>に位置づけられている。「共生プログラム」は、「社会や地域の発展に寄与しようとする生徒」とあるが、雄志中学校（2018a）の平成30年度グランドデザインにおいては、「創造」プロジェクトとして道徳の時間と同じ枠組みとなっている。これらの枠組みの変化については判然としませんが、「創造」プロジェクトは「自己を見つめ社会や地域の発展に寄与する生徒」となっている。

3. 視覚的カリキュラム表

学校の教育課題は、授業づくりに反映することで初めて解決が図られるため、「どのようにカリキュラムを構築し、授業を進めていくか、具体的にイメージし、マネジメントするツール」が「視覚的カリキュラム表」である。「年間カリキュラムを実践・評価・改善を含むまとまりとして考えたとき、可視化することによって、見直しをもった取組

が実現」する。そして、「評価～改善の営みが、教職員を鍛え、学校力を高め」とする。

視覚的カリキュラム表の作成・活用においても次の4つのポイントが示されている。

- ①視覚的カリキュラム表のよさを確認する
- ②学校課題をカリキュラム表に落とし込む
- ③視覚的カリキュラム表を創り続ける
- ④視覚的カリキュラム表の活用を工夫する

以下同様に、平成24年度の雄志中学校の④の実践から引用する（太字）。

④グランドデザインを効果的に活用する

＜視覚的カリキュラム表への位置付け＞

グランドデザインの3つのプログラムを機能的に実践するために、視覚的カリキュラム表に3つのプログラムのボタンを設定し、年間指導計画に位置付けました。

また、教科間や総合的な学習の時間、道徳の時間、特別活動がそれぞれ関連付けられるように、単元や題材、活動を調整し、効果的に配置して指導しやすいカリキュラム表にしました。

＜グランドデザインと視覚的カリキュラム表をつなぐ構造図＞

グランドデザインと視覚的カリキュラム表との関連性を図るため、3つのプログラムの年間活動構造図を作成し、それぞれの活動のねらいや意義と活動との関連性を視覚化しました。視覚化することにより、評価のPDCAサイクルを機能しやすくするとともに、見通しをもって実践できるようにしました。

平成24年度における視覚的カリキュラム表のプログラムのボタンとは「自立プログラム」「共生プログラム」「深化・統合プログラム」であり、それぞれが、青、橙、緑で分けられ年間指導計画に入れられている。3色に色付けされることによって、相互の位置づけが分かりやすくなる点に特色がある。

以下では、最新の雄志中学校（2018b）における平成30年度における総合的な学習の時間の視覚的カリキュラムを取り上げる。ここでは、ボタンはより細分化され「郷土愛、かかわる力、みつめる力、やり抜く力、夢おこす力」の5色となっている（ここでは、色付けは省略している）。

平成 30 年度雄志中学校 視覚的カリキュラム 「総合的な学習の時間」

月	4月	5月	6月
1年	オリエンテーション 宿泊体験学習ガイダンス	宿泊体験学習 ・係活動 ・炊飯計画	宿泊体験学習 ・振り返り、まとめ
2年	オリエンテーション 宿泊体験学習ガイダンス	わくわく活動 ・企画 ・実施と振り返り	職業レディネステスト 職場体験学習① ・地域の職業調べ ・体験先決定 ・PRシート作成 ・マナー学習
3年	オリエンテーション わくわく活動ガイダンス	わくわく活動 ・企画、準備 ・実施と振り返り	公立高等学校説明会 ・事前学習 ・説明会参加 大学訪問 ・事前学習 ・大学訪問

月	7月	8月	9月
1年	「働くこと」の意義についての学習 ・小学校の総合紹介 ・地域の職業調べ① ・職場インタビュー		職場インタビューのまとめ 発表会
2年	職場体験学習② ・事前訪問 ・上越夢チャレンジ5日間		職場体験学習③ ・礼状を書こう ・職場体験発表会
3年	大学訪問（6月より継続） ・事前学習 ・大学訪問		私立高等学校説明会 ・事前学習 ・説明会参加

月	10月	11月	12月
1年	地域の職業調べ② 職業人講和	上越の偉人① 偉人調べ 偉人講和	上越の偉人② 現地学習
2年	修学旅行ガイダンス	修学旅行① ・上越調べ学習 ・関西調べ学習	修学旅行② ・班別自主研修の計画 修学旅行③ ・上越PR大作戦
3年	地域貢献活動 ・計画 ・実施と振り返り	進学進路に向けた計画 ・入試説明会 ・願書の下書き	

月	1月	2月	3月
1年	上越の偉人③ 偉人紹介新聞	上越の未来を考える	
2年	修学旅行④ ・行事計画の決定 ・係り、役割分担の確認 ・しおりの作成と読み合わせ ・修学旅行の実施、振り返り		
3年	卒業プロジェクト ・企画、準備 ・卒業式に向けた準備		

「創造」のプロジェクトの目標である「自己を見つめ社会や地域の発展に寄与する生徒」との関連で、特に「地域」に関わる実践をこれらの視覚的カリキュラム表で確認するならば、1年では、「地域の職業調べ、職場インタビュー、上越の偉人、偉人調べ①～③、偉人講和、偉人紹介新聞、上越の未来を考える」であり、2年では、「わくわく活動、職場体験学習①～③、上越調べ学習、上越PR大作戦」、3年では、「わくわく活動、地域貢献活動」となっている。2年と3年の5月にある「わくわく活動」とは体験活動を通じた学年・学級づくりであり、雄志中学校（2015）による平成27年の活動では、2年生が、公園等でのゲームや野外炊飯、オリエンテーリングであり、3年生は地元の職人によるそば打ち体験の活動に加え、遠足や温泉入浴といった地域と密着した集団体験となっている。また、2年生の修学旅行において特長があるのは、「上越調べ学習、上越PR大作戦」であり、修学旅行の事前学習として上越のよさを調べ、旅行地において上越をPRするという特色ある活動も取り入れている。

4. 地域とともにある学校とカリキュラム

- ①学校と地域で学校評価
- ②戦略的に地域とかかわる
- ③子どもの成長で地域を変える

平成30年度の雄志中学校グランドデザインでは、教科学習と特別支援教育における「自立」、特別活動における「共生」、道徳と総合的な学習の時間における「創造」、生活習慣指導、体向上活動における「健康」といった4つのプロジェクトにおいて、「実践事項」と「目指す成果・評価方法」をそれぞれ工夫している。このなかの道徳と総合的な学習の時間における「実践事項」と「目指す成果・評価方法」を示すと、次のようになる。

「実践事項」

- 1 3年間のストーリーのある継続的、発展的な体験活動の工夫
 - ・地域の特色を学び（1年）、その良さを発信し（2年）、地域未来や自分の生き方を考える（3年）地域学習の推進
- 2 学習や体験活動での学びを自分の生活へ生かす道徳実践力の育成
 - ・体験活動の学びを深める道徳授業の工夫・展開
 - ・価値ある生き方（志）の高まりを目指した、道徳授業の展開

〔目指す成果・評価方法〕

- 1・生き方への考えを深められる生徒 80%以上
 - ・地域や社会のために貢献できる生徒 80%以上
- 2・学んだことや考えたことを日常生活で生かそうとする生徒 80%以上
 - ・学習や体験活動、道徳で学んだことや考えたことを家族と語り合える生徒 80%以上
 - ・自他の人権を守るためによく考え、判断して行動できる生徒 80%以上

これらのうち、特に「目指す成果・評価方法」は平成 24 年度にはなかったものであり、より具体的な評価方法が数値として提示されている。

5. 授業をつくる

- ①追求意欲を高める課題設定の工夫
- ②納得した知を導く支援
- ③多様な教育的ニーズに対応する授業をデザイン
- ④新しい気づきや学びの深まりを生む場の設定

平成 25 年の「上越カリキュラムハンドブック」の「授業をつくる」では、小学校の 4 年の算数と中学校 1 年の社会の実践が取り上げられているが総合的な学習の時間はない。そこで、ここでは総合的な学習の時間と国語科を横断的につなぎ、「深い学び」に結びつけた実践として上越市立高士小学校における大下（2017）の実践「川とともに一さくらっ子川水季」を取り上げる。

大下のまとめた概要は以下である（太字）。

学校の近くを流れる身近な二つの川を舞台に、年間約 30 回の体験活動を行った。教師はいつ、どの場所へ連れていくかを設定し、そこで何をするかは子供に委ねた。体験、作文、振り返りの活動のサイクルに加えて、子どもの作文や様子を見取りながら、意図的に次のような環境を整えた。川の本棚や水槽の設置、詩・歌・物語づくり、川に関する絵本を読み聞かせ、川の命や川のはじまりを考える機会、教科や学校行事との関連、討論会などである。このような環境を整えながら、子供とともに、カリキュラムをつくり出していった。

本実践は、①総合的な学習の時間の体験を国語科に生かす②国語科の学びを総合的な学習の時間に生かすという 2 側面がある。

①においては、総合的な学習の時間に「主体的に活動し、自ら気付きを得た学び」こそが、二つのカリキュラムをつなぐポイントだとし、新聞づくりと創作という二つの事例をあげている。新聞づくりの例では「カニを捕まえた人にインタビューし、その時の

気持ちや方法などを記事にまとめ」たり、「川で楽しかったのは何回目かをアンケートで調べ、ランキングにする」といった活動により、「新聞を通して、川での活動に関する情報が学級全体、さらには学校全体へ広がって」いった。また、創作詩では「川の気持ちになりきって詩をつくる活動が大好き」になり「川に立場になって考える」ようになっていった。

②における実践は、討論会と年間の振り返りという二つの事例である。「いよいよ卵から育ててきた鮭を放流する」時期に、どの川に放流するのかの討論会では、「鮭の故郷である桑取川」か「自分たちが慣れ親しんできた正善寺川」かで議論は白熱し、川や魚の立場になって真剣に考えている。「子供たちにとって必要感のある総合の内容を討論のテーマに据えることで、本気になって討論することができ、それが『深い学び』につながっていった」のである。また、年間の振り返りにおいては、「川ブック、川ガイドブック、川カレンダー、川日記、川の俳句、川アルバム、川図鑑」等様々な表現方法用いた意欲的なまとめとなり、「学びの深まり」がみられている。「文章を書く国語の力、地図についての社会科の力、生き物についての理科の力、魚の絵を描く図画工作の力」といった各教科の力が総合的な学習の時間と結びつき「相互に作用」することによって生き生きとした「深い学び」となっている。

おわりに

本稿では、地域と密着した上越における実践を事例として、「探求的な見方・考え方」を働かせ課題を解決し自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成と、「各学校における教育目標」と総合的な学習の時間の整合性という二つの課題を踏まえつつ、そのカリキュラム・マネジメントの在り方を検討した。こうした「上越カリキュラム」という市の総力による計画的組織的な取り組みは地域密着型の先進的事例であり、これからの地域における協働的な実践のひとつの指針となるものである。本事例における今回の総合的な学習の時間の改訂に関する目標の二つの課題についてまとめると、以下のようになる。

地域や子どもたちの現状を踏まえ、「探求的な見方・考え方」を働かせ課題を解決し自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成については、雄志中学校においては「地域の職業調べ、職場インタビュー」「上越の偉人調べ」「偉人紹介新聞、上越の未来を考える」「上越調べ学習、上越PR大作戦」など、地域を基本とした「探求的な見方・考え方」を深め、キャリア教育を踏まえた生き方指導の実践がなされていた。同様に、

高士小学校においても総合的な学習の時間における川体験をもとに、「新聞づくりと創作」といった探求的で意欲的主体的な実践が展開されていた。

また、「学校における教育目標」と総合的な学習の時間の整合性についての課題に関しても、雄志中学校では、教育目標とされてきた「知性を高め、豊かな心を持ち、たくましく実践する生徒」という教育目標を達成するために、キャリア教育を中核とするその重点目標として「大きな志を抱き、限りなく伸びようとする生徒の育成」を掲げ、総合的な学習の時間を初め授業力向上を基盤にした自立の力を育成する研修の共通理解と日常化を図りつつ、キャリア教育を踏まえた生き方指導の実践につなげている。

上越市創造行政研究所（2007）による約10年前の調査と比べると、現在の上越市は14000人を超える人口減少となっており、少子高齢化も進み3大都市圏以外の地方圏と同様の現象が起きている。このような時代背景の中、村川（2013）が鳥取県八頭町立八東中学校の総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメント実践について述べるように、地方の多くの地域における「教科等の学力を付けることが最終的には生徒が地域を捨てることにつながるという問題」は今日的で深刻な問題である。この時代的社会的問題はいかんともし難い隘路であり、「地域のよさを分かった上で自分の進路を考える」生徒を育てたいというのが特にこうした地域の学校の共通認識と教育方法であり、上越市においても同様の課題となっている。課題は山積してはいるが、上越市を先駆としたこのような地域と歴史を踏まえた地域ぐるみの学校教育実践の継続と進展を今後も期待せざるを得ない。

新しい学力観にも絡んで、藤田（2005）は総合的な学習の時間を「見えにくい教育方法」として捉えている。総合的な学習の時間は教科学習の削減という問題と表裏一体の関係にあるため、今後の増減を含めて質量ともに継続的な議論が必要である。

<文献>

大下さやか（2017）。「総合的な学習の時間を軸に各教科をつなぎ、『深い学び』を生み出す」田村学『カリキュラム・マネジメント入門』東洋館出版社。

上越市教育委員会（2008）。「上越市学校教育目標で目指す子供の姿」

（http://www.jecomite.jorne.ed.jp/contents01/cur/2_2103.pdf 2018. 5.25）。

上越市創造行政研究所（2007）「上越市の人口の現状」

（<http://www.city.joetsu.niigata.jp/uploaded/attachment/21696.pdf> 2018. 5.30）。

上越市立教育センター／上越カリキュラム開発研究推進委員会（2013）. 「上越カリキュラムハンドブック」

(<http://www.jecenter.jorne.ed.jp/29pdf1/2906%20handbook.pdf> 2018. 5.25).

藤田英典（2005）. 『義務教育を問いなおす』 筑摩書房.

村川雅弘他編著（2013）. 『「カリマネ」で学校はここまで変わる！』 ぎょうせい.

文部科学省（2017）. 「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」

(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1387018_12_3.pdf 2018. 5.20).

雄志中学校（2015）. 「感奮！雄志魂：雄志中学校だより 平成27年5月号」 (<http://www.yushi.jorne.ed.jp/otayori/473/file1.pdf> 2018. 5.30).

雄志中学校（2018a）. 「雄志中学校グランドデザイン：平成30年度」

(<http://www.yushi.jorne.ed.jp/otayori/2018/8820/1becb6e5cd1c0c1f9070.pdf> 2018. 5.30).

雄志中学校（2018b）. 「雄志中学校視覚カリキュラム：平成30年度」

(<http://www.yushi.jorne.ed.jp/> 2018. 5.30).